牡丹に託した父の想いに感謝

中川 さおり 茨城県日立市 三十歳

「牡丹の花が咲いたよ」

久しぶりに、父からLINEが届いた。届いた写真には、八輪ほどの牡丹が、光を浴びて、太陽に向かって鮮やかに咲いていた。その後には、体を気遣う短いメッセージも添えられていた。父とLINEをするのは、帰省や宅配物のやり取りくらいで、日々の出来事について話すことはほとんどなかった。

この牡丹は、母が生きていた頃から庭にあった。咲かない年もあり、「今年は咲くかな」と母は楽しみにしていた。母が亡くなって七年が経つが、父が母の想いを受け継ぎ、大事に育てていることを思うと、胸がじんわり温かくなった。

私は今、お腹に赤ちゃんがいて、母になろうとしている。ちょうどそのことを電話で伝えた後のLINEだった。父は、妊娠したことを喜びつつ、つわりや体調が心配で連絡してくれたのかもしれない。感謝の気持ちで胸がいっぱいだ。

先日、帰省すると、父はなすやピーマン、トマトも育てていた。それは一人で食べきれないくらいの苗の数だった。姉や私、孫たちが収穫を楽しむと、父の顔に小さな笑みが浮かんだ。自分のためというより、私たちのために育てているのだろう。

実家を離れても、父の愛は細やかな行動に感じられる。なかなか感謝を伝えられないけれど、LINEを返したり、帰省したりして、共に過ごす時間を大切に積み重ねていきたい。

「お父さん、いつもありがとう。赤ちゃんが生まれたら帰省するから、楽しみに待っていてね。」